

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和8年4月14日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立城南第二小学校

品川区学力定着度調査 結果について（国語）

（１）各教科の定着状況についての概要



全国平均正答率と校内平均正答率を比較すると、全学年とも各学年の全国平均正答率を上回っている。さらに、3・4・5年生は区平均正答率もともに上回っている。本校の2年生から6年生まで、基礎学力の定着状況はおおむね良好であるといえる。

（２）具体的な課題

全国平均正答率・区平均正答率と比べると、本校の平均正答率が高いが、以下の領域に課題がある。

①高学年の読む能力

「読むこと」領域の説明的文章の問題では、要点を書き抜く問題の誤答が多かった。

②全学年の書く能力

「書くこと」領域の問題では、全学年とも無回答の割合が他領域と比べて高い傾向にあった。

③言葉の特徴や使い方に関する事項の習得

5年生「連用・連体修飾語」6年「漢字を書く」の正答率が低かった。

（３）課題の原因として考えられること

①の要因

説明的文章を読む際に、どの段落に何が書かれているかの構成を把握する力が身に付いておらず、書き抜くべき言葉を見付けられないことが原因だと考えられる。

②の要因

問題で指定される＜注意する点＞（複数有り）を踏まえて、相手に伝わるように自分の考えを順序立てて文章に構成する力が不足していることが原因だと考えられる。また、資料を読んで自分の考えをもつ力や、考えたことを具体的な文章（意見文や報告文、スピーチ原稿など）にまとめる経験が不足していることも原因だと考えられる。これらの原因から、書くことへの抵抗感が生まれやすく、無回答の割合が多くなっている。

③の要因

小単元の学習で用語の理解・定義の暗記などにとどまってしまう、初めて見る問題を解く際に汎用できていないことが原因だと考えられる。

（４）問題解決のための方策（取組指標）

①高学年の読む力②全学年の書く力の課題について

資料を読み取るための指導（読むことの指導）と、自分の考えを書くための指導（書くことの指導）が必要であるとする。児童が読むことの学習で獲得した書くための知識（文章構成など）を、書くことの学習で活用できるよう、読むことと書くことの指導を行きつ戻りつしながら横断的・往還的に学習を進められるようにする。

②全学年の書く力の課題について

まず自分の考えをもつことができるようにするために、テーマトークの活動を行う。児童にとって身近な択一式のテーマから、資料を読んでどう思うかを問うテーマへ段階を踏んでいくことで、根拠に基づいて自分の考えをもつ力を付けていく。

文章を書く際には、自分の考えを書き進められるように文章構成の型を示す。その型に合わせながら書くという基礎を身に付ける指導と、身に付けた基礎を生かして自身の力で書くという発展的な指導を繰り返していき、書く力を高めていく。また、下記のような評価の基準を児童に示すことで、＜注意する点＞を踏まえた上で記述することへの抵抗感を軽減しながら、自分の考えを書き進められることへつなげていく。

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| 1. 自分の考えと理由を書けている | 2. 二つの段落に分けて書けている |
| 3. 400字程度書けている | 4. 資料から読み取った数値やデータを書けている |
- ※ 4. は高学年向きの基準

③言葉の特徴や使い方に関する事項の習得について

言葉の特徴や使い方について、小単元の学習で用語の理解・定義の暗記などにとどまらず、他の単元の学習ともつなげて横断的に指導していく。文章を読んだり書いたりする際に、小単元で学んだことが実際に文章の中でどのように活用されているかを確認できるようにする。漢字学習についても同様に、習った漢字は必ず使って文章を書くようにする。

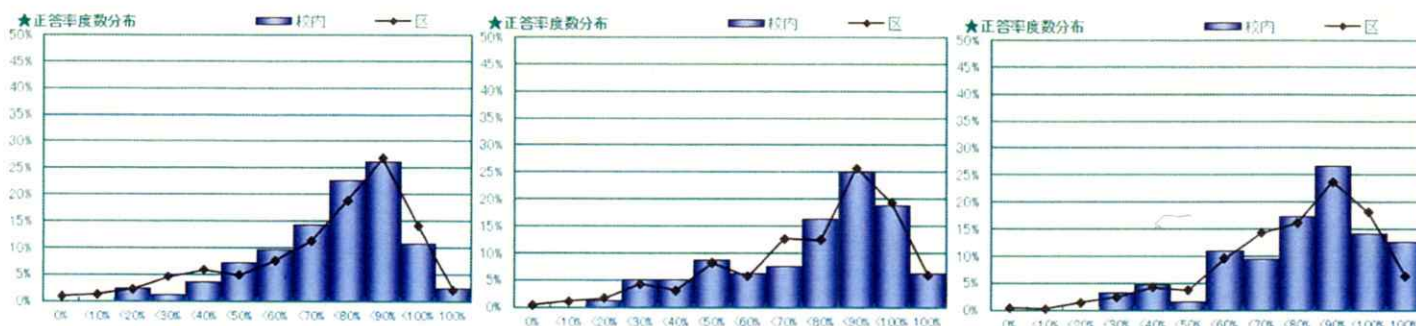
品川区学力定着度調査 結果について（社会科）

（１） 定着状況についての概要

4 年

5 年

6 年



4 年生、5 年生、6 年生の正答率は、いずれの学年においても全国平均および区平均を上回っている。領域別正答率で見てもすべての領域で目標値を上回っており、全体として良好な定着状況を示している。

しかしながら、各学年とも資料（地図帳、統計、写真、年表等）から必要な情報を正確に読み取ったり、複数の資料を関連付けて根拠を基に記述・説明したりする問題において、正答率が目標値を下回るなどの課題が見られる。

（２） 具体的な課題（▼▲は目標値との比較。上で記入があるものは、目標値とあまり変わらない単元）

各学年の正答率の低い問題として、下記のものが挙げられる。

4 年生

・市の様子の移り変わり（市の人口と鉄道の利用者数の変化について、資料をもとに考え表現している。▼12.1）

5 年生

・くらしを支える水・ごみの処理と利用（▲5.4）

・特色ある地域（▲4.2）

6 年生

・日本の水産業（日本の主な漁港と水揚げ量についての資料を読み取っている。▼6.2）

・情報生かした産業（さまざまなメディアの特徴について理解している。▲2.5）

・自然環境と国民生活（自然環境を守る取組について、適切な資料を判断している。▲3.8）

（３） 課題の原因として考えられること

4 年生... 二つの資料を見比べて、そこから分かったことを考察するという学習が不十分だった。単一の資料から読み取るだけでなく、複数の資料から情報を読み取り関連付ける学習の機会が不足していたことが原因と考えられる。また、身近に感じられない事柄を捉えるために、想像力を育む手だてが必要である。

5 年生... 先人の働きでは、年表や文章による資料と、それを別の言葉に言い換えた文章をつなげる問題の正答率が低かった。まとめを自分で考えることや、よいまとめを共有すること、学習した単元で触れていない地域についての話題になったときに同じように考えることができていない。また、自分で資料を読み取る力ももう少し必要であると考えられる。

6 年生... 地図図表や統計資料、グラフなどの資料を読み取り、必要な情報を関連付けて判断することに課題がある。資料から読み取った内容を根拠として説明する活動を継続的に取り入れ、知識の定着は見られるものの、資料を活用して自分の思考をまとめ、判断力・表現力へとつなげる学びが不足していたと考えられる。

（４） 問題解決のための方策

① 地図帳や地図記号・資料の積極的な活用と技能の定着

4・5・6 年生では、各地や国について調べ学習をする際に地図帳や各種資料を日常的に活用し、調べ方や場所、記号の意味について正確に理解させる。知識として覚えるだけでなく、必要な時に地図帳や統計資料を自発的に活用できる技能を身に付けさせていく。

② 複数資料の読み取りと根拠をもった記述・交流時間の試み

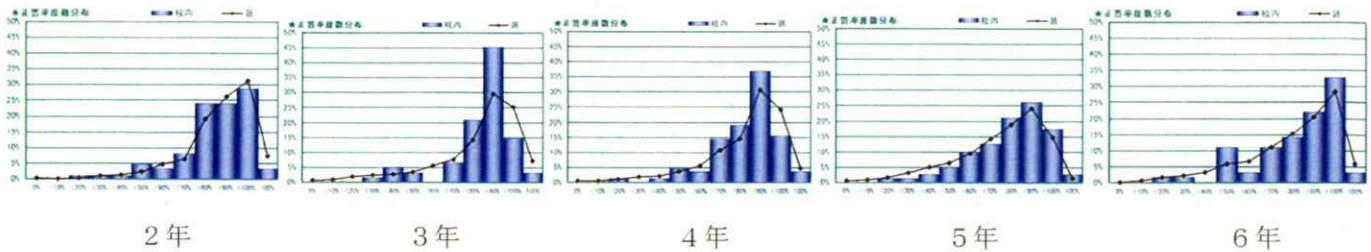
全学年に共通して言えることは、資料を基に考察し、自分の考えを根拠とともに説明する力がまだ十分ではない点である。複数の資料を見比べて考える視点を提示し、自分で読み取ったことや考えたことを友達同士で交流・整理する時間を毎単元で設定し、思考力・判断力・表現力を高めていく。

③ 調べた内容からまとめを書く

調べたことから自力でまとめを書くことで、調べた内容を抽象化し、知識として捉えることができるようにさせたい。また、他の単元でもその知識を使って考えられるよう声掛けをすることで、自力で学びに向かう力を伸ばす。

品川区学力定着度調査 結果について (算数)

(1) 各教科の定着状況についての概要



正答率をみると、全学年とも各学年の全国平均、区平均(2年生を除く)を上回っている。おおむね定着状況は良好であるといえる。

(2) 具体的な課題

全国平均、区平均値と比べると、本校の平均正答率が高い。ただし、学年によっては平均正答率の低い領域がある。各学年の正答率の低い領域を以下に示す。

- 2学年「120 までのかず」集合数を理解している。「3つのかずのけいさん」3口の加減混合の計算をする。
- 3学年「たし算・ひき算」加法の結合法則を用いた計算をする。波及的繰り下がりのある3桁-2桁の計算をする。「10000 までの数」百の位が同じ3位数で、十の位の数字を比較して大小を判断する。
- 4学年「円と球」直径の長さは半径の2倍であることを説明する。
- 5学年「いろいろな形」平行四辺形の作図をする。
- 6学年「小数の計算」小数第一位×小数第二位の計算をする。

(3) 課題の原因として考えられること

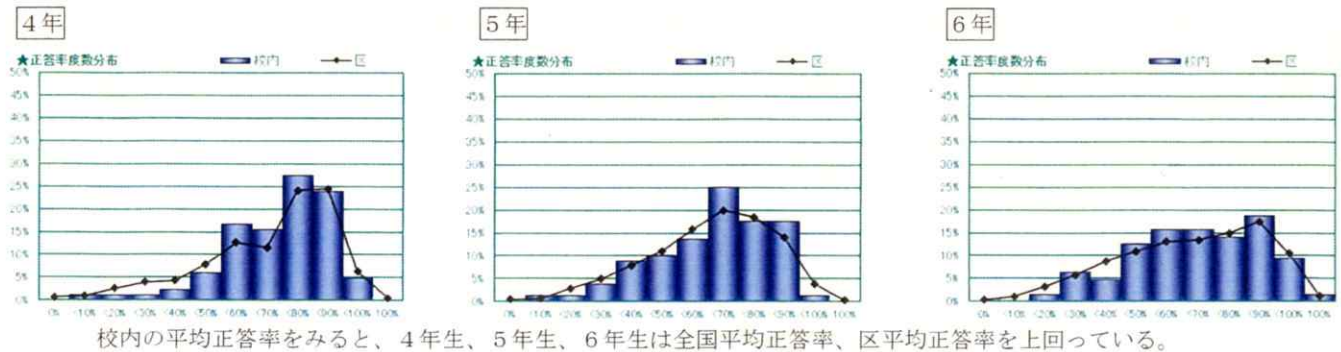
- 2学年…文章や図から必要な情報を読み取り、式や既習の図形と関連付けて考えることに課題が見られた。
- 3学年…「たし算・ひき算の筆算」機械的に筆算をしており、数の構成の理解が不十分である。繰り下がりの書き忘れが原因と考えられる。「たし算・ひき算の計算のきまり」()の中を先に計算するという意味理解が不十分なのが原因と考えられる。
- 4学年…円や球のもつ構成要素の関係を理解することや、直径は半径の2倍であることを理解し説明する力に課題がある。
- 5学年「図形」平行四辺形の性質に基づき、コンパスや定規を正しく操作して描けていない。
- 6学年「小数の計算」①繰り上がりが多い②空位がある③小数点の付け方、の筆算を計算することに課題がある。

(4) 問題解決のための方策

- 2学年…問題場面を図や具体物で捉える活動を充実させる。具体物を通して図形感覚を育成する。
- 3学年…数の構成を理解させるために、動画の視聴や掲示物の提示で視覚的に捉えさせる。筆算では繰り下がりの確認を忘れないよう反復練習させ、習得させる。
- 4学年…具体物を操作することにより、円や球の構成要素の関係を体感させ、理解につなげる。円の定義について改めて確認することにより、直径は半径の2倍であることを論理的に理解し、説明できるようにする。
- 5学年…平行四辺形の構成要素や性質を理解し、それに基づいて三角定規、コンパス、分度器を操作する意味を確認してから図形を描く問題に取り組むようにする。図形の構造的な理解と作図技能の定着を図る。
- 6学年…3桁×3桁の筆算を基本として、それに小数点をつけていくという基本を押さえ、繰り上がりや空位のある場合の答えを書く位置に気を付けながら反復練習させ、習得させる。

品川区学力定着度調査 結果について（理科）

（１）各教科の定着状況についての概要



（２）具体的な課題

各学年の正答率を「基礎・活用」「領域」「観点」「解答形式」のカテゴリーで分析し、以下に示す。

■ 4年生

「基礎・活用」「領域」「観点」「解答形式」すべてのカテゴリーで全国、区の平均を上回っている。

■ 5年生

「領域」生命・地球では、全国平均、区平均より低くなっている。

■ 6年生

「基礎・活用」「領域」「観点」「解答形式」すべてのカテゴリーで全国、区の平均を上回っている。

→どの学年も共通して、記述問題の正答率が低くなっている。

→知識を活用した問題の正答率も低い傾向にある。

→各学年の誤答分析結果から、理科の用語や知識とそれを表す事象が結び付いていない児童が一定数いる傾向にある。

（３）課題の原因として考えられること

- ①学校のテストから学力調査に変わると記述式の正答率が低くなる。それは、実験結果や考察など、学習した内容が生活場面と切り離されていて、様々な問題に対応できる生きた知識・技能の習得にはつなげられていないためだと考える。
- ②実験や観察を実際に行えなかったり、実験手順や意図を理解できていなかったりすることで、実感の伴った理解が不十分になり、知識・技能の習得や実験結果を基に考えたことを表現する力の定着に影響が出ると考えられる。
- ③時間の経過に伴い、身に付けた知識を忘れてしまう児童が多い。理科の学習で獲得した知識を言葉や文章で表現する機会が少ないためだと考えられる。

（４）課題解決のための方策

①実験結果や考察を共有する時間の確保やノート指導

考えたことを表現できるようにするために、何を、どのように書いていくとよいのかについてノート指導を行う。例えば、「AとBを比較してみて違ったところを書いてみよう。」「C実験ではこんな結果、D実験ではこんな結果。共通していることはなんだろう。違うところからどんなことが分かるかな。」などの具体的な表現の視点を与えることで何を書くのかを明確にする。まずは一人一人が「実験結果」「考察」をまとめる時間を十分に確保する。

また、まとめた内容を「全員で共有する時間」の充実を図る。全員で共有する時間は、特定の児童が発表し板書を書き写すのではなく、自分の言葉でまとめた考えと友達の考えを比較し、一人一人が深く問題について考える機会とする。

②実物の観察や実験など、実体験を通した学習の準備、学習展開

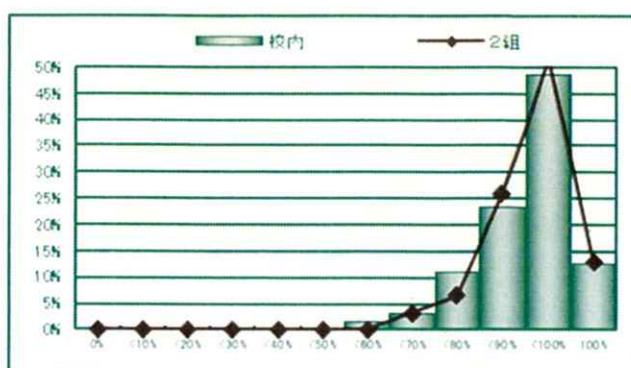
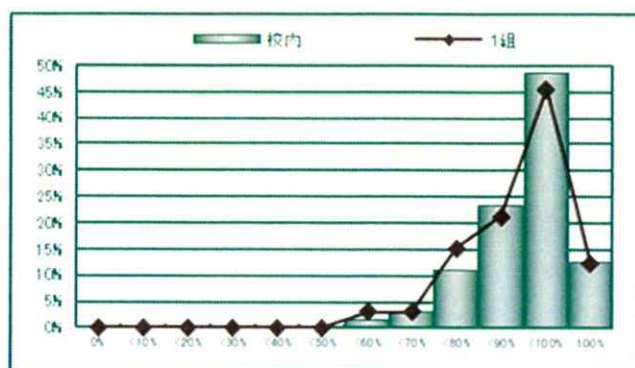
問題を解決する際に、目で見、手で触るなどして実際に体験することが児童の学びを支え、深い学びにつながっていく。動画教材だけに頼らず、できる限り実物を見て観察、実験を行えるように計画的に具体物や観察対象の準備を行う。単元によっては年度初めからの準備も必要であるため、年度末や進級後に引き継ぎを行う。

また、実験の手順を児童自身が考えられるように授業を展開する。児童自ら実験計画を立てることで、実験の意図が理解でき、実感の伴った理解につながると考えられる。その際、実験方法を図や表、ICTを活用して示し、児童の理解を助けるようにする。

③生活場面との結び付きを意識した導入や学習内容の工夫

普段の生活で実体験の少ない内容や意識して考える機会が少ない内容に関しては、学習内容と生活経験を結び付けた指導が必要である。例えば、動画などを用いた問題の提示や、生活経験で類似する現象の紹介、実物を用いた体験活動などが考えられる。単元の導入やまとめにおいて、学習内容と生活経験を結び付けた指導を行うことで、児童自身が学ぶ必要性を感じながら、知識・技能の習得に向けて主体的に学ぶことにつながると考える。

品川区学力定着度調査 結果について（英語）



(1) 各教科の定着状況についての概要＜6年＞

本校の平均正答率は、全国平均・区平均をとともに上回っている。他の4教科に比べて英語は最も正答率が高い。その中で、「単語や表現の意味理解（聞く）」問題は、他の問題に比べて比較的正答率が低い結果となっている。身近で簡単な語句を聞き、その意味を理解しているか問う問題であり、目標値を下回っているか、目標値と同程度となっている。

(2) 具体的な課題

1組・2組の誤答を一つ一つ確認していくと、音声を読み、五線に「j」を書く問題では、大文字を書いてしまう解答が全体の12.5%であった。また、「b」を書く問題では、「D」や「d」を書いてしまう解答が全体の14.1%であった。

これらの誤答の理由として、字形が似ているアルファベットの書き分けや、大文字と小文字の書き分けができていないことが考えられる。文字の形を体で表現する活動を、低学年のうちから行うことで、字形を体に定着させていく。

(3) 課題の原因として考えられること

書くことだけでは字形を覚えられない児童がいる。

(4) 問題解決のための方策(取組指標)

●聞くことに関する活動の充実を図る

情報を聞き取ることができるようにするためには、授業の中で、聞くことを通して理解する活動を繰り返し行うことが重要である。例えば、学習者用デジタル教科書の活用のほか、教師による最近の出来事についての話や、ALTなどによる簡単なスピーチを聞く活動などが考えられる。このような活動を、可能な限り自然な口調で話される音声に触れて、慣れさせるための学習活動を充実させる。

●音声スクリプトを活用する

「知識」の側面に課題があると考えられる場合には、音声スクリプトを提示し、話された内容における語彙や表現、文法などを理解することができなかったり、音声を読み取れなかったりした箇所を各自で確認する機会を設ける。その後、児童が書かれている内容の意味を理解するように指導したり、音の変化に着目して特定の箇所を聞かせたりすることが考えられる。音声スクリプトで話された内容を確認した後は、再度、音声のみで聞き、聞き取れなかった箇所を聞き取ることができるように指導する。

●デジタル教科書を活用し、「聞くこと」の活動を繰り返し行う

「技能」の側面に課題があると考えられる場合は、デジタル教科書を活用して、①音の変化に着目して特定の箇所を聞く ②速度を落として聞く ③繰り返し聞く ④文と文の間にポーズを置いて聞く

などの活動を行い、標準的な発音や語と語の連結による音の変化、抑揚やリズムなどの英語の音の特徴を具体的に指導することが考えられる。活動後には、再度、元の速さで話された音声を聞かせ、児童が活動前と比較して聞き取ることができるようになった実感をもたせる。